

「雨が止んだら」

セミ丸

噓せかえるような湿気と暑さに息苦しさを覚え、俺は目が覚めた。

また、雨が降ってきた。

温暖化の影響によるものか、近頃の雨は降るとなると一度に降ってくる。

経年劣化がすすんだこの地下室の壁からは水が浸みだし、補修に気をとられている間に今度は床も浸水しはじめた。

「もう、うんざりだ」

思うよりも先に言葉が出てしまう。どのくらい経つだろうか、奴等から逃れてここへやってきてから。

俺の兄弟はみんな奴等に殺された。

助けたくても助けるどころの話ではない、そのときは逃げるだけで精一杯だった。群れることで安慰を得る奴等は、ひとたび異物を見つけると一つのかたまりとなって敵に襲いかかる。

それ以上に厄介なのは、奴等が団結するために敵を必要とするところだ。

排他的な反面、積極的に敵を探そうとする。

その矛盾の捌け口として一方的に敵とみなされ襲われる方からすれば、迷惑以外のなにものでもない。

群れない俺達には敵など必要ないというのに。

執念深い奴等はいまだに俺のことを探し続けている。

地下に潜伏してからも、追手の目を逃れるためにこれまで何度か上っ面を変え、居場所もその都度変えてきた。

地上への輸送ルートに近いここなら食料に困ることもない、

地下には血管のように幾重にも張り巡らされた流通ルートがあって、そこを通じて大量の物資が運ばれてくる。

俺はそこから少し、そうほんの少しを拝借して日々を生きながらえている。

ようやく手にした安息の地、今度こそはと確信していたのだが……この雨さえなければ。

朝から降り続いた災害級の大雨は、午後になるとその勢いも次第に弱まり、地下に流れ込んでくる水の量も徐々に少なくなってきた。

どうなることかと思ったが、今回の雨もなんとか切り抜ける事ができそうだ。雨が来るたびに水との戦いを強いられるのであるから、穴蔵暮らしも楽ではない。

そんな綱渡りのような地下生活に嫌気がさして、住み慣れた地を離れ地上へあがるものも少なくはなかった。

こないだまでいた隣の「会長さん」もそのひとりだ。

逃れた先に何があるというのか、ここよりも安全な場所などどこにもないはずなのに。

風の噂では「会長さん」はその後、車に轢かれて亡くなったらしい。

膝下までできていた水もようやく引き、壁の補修にも目処がたつと、今度は他所の事が気になってきた。

俺は一息ついたあとで、今回の雨による被害状況を把握するため、外の様子を確認しにくくことにした。

梅雨時の地下は宛ら蒸し風呂のようで、湿気が酷く息をするのもままならない。

そのうえ、主要な通路のほとんどが、冠水。もしくは崩落により通行できなくなっていた。緩んだ地盤は崩れやすく、さらなる被害をもたらす危険性もあり、復興にはかなりの時間と労力を要するだろう。

俺が壁に手をかけると、微かにだが遠くで土を動かす振動を感じた。奴等かもしれない。俺は瞬時に身を守るための様々な選択肢を想い浮かべる。逃げる事、あるいは相手の人数によつては……。

とはいえ、随分と音が弱く、小さい。

常に集団行動をとる奴等にしては珍しく一人……いや、ひょっとすると奴等ではないのかもしれない。

俺は兄弟達を殺した奴等のことをいまでも許すことができない。

普段この様な感情は、心の中心から最も遠い場所に隔離してあるのだが、ふとしたきっかけで蓋が開くと、瞬く間に全体が支配されてしまう。

この先に居るのが奴等なら、もしも奴等に復讐できる機会があるのなら……。

逡巡したのち、俺は音の主をこの目で確かめにいく事にした。

掘り進める手に微かな震えを覚えながら。

道を塞いでいた土砂を取り除き進んだ先にいたのは、やはり奴等の仲間の女兵士であった。

崩れた土砂の下敷きになり、一人で動けなくなっている。周りに仲間はいないようだ。

仲間が助けに来たと勘違いしたのか、その女は俺を見るなり落胆と、そのなかにどこか安堵したような含みのある表情をみせた。

「仲間でなくて残念だったな」

「いいえ、たとえ仲間が来ても見捨てられていたわ。私たちは働けなくなると用済みになるの」

意外な答えに驚いた。

こいつ等はどんなときにも仲間同士結束し、助け合う集団だと思っていたからだ。

「俺の家族はお前の仲間に殺された。そのときに奴等が言っていた。真面目に働かない俺達

が死ぬのは当然だと。そして自分達が長生きできることも自慢していた。こうして事故に遭ってしまえば長生きも糞もないな」

俺が言い放った皮肉にたいしても、女はフツと小さく笑い返した。

「私たちは死ねないだけよ。生まれた時からそれが決まっていた。子を残せるのはほんの握りの選ばれた者だけ。他の者達はみな親や兄弟の世話をして死ぬまで働き続けるしかないのよ」

「早く死にたそうな口ぶりだな」

「ええ、ようやく、ようやく楽になれる。今度生まれ変わったら、空を飛んでみたいわ。ずっと地面をはいずり回ってきたんだもの。そしてあなたみたいに死を悼んでくれる家族にも恵まれない」

息も絶え絶えに擦れ声でそう語る女を見ていたら、それまで兄弟を殺された恨みで煮えくりかえっていた自身の心に虚しさを覚え、怒りの念がみるみるしぼんでいくのを感じた。あれほど憎くてたまらなかったはずなのに。

「あなたの家族の事はごめんなさい。私達も生きていくためにそうするしかなかったの」俺が返答しかねていたところ、女は最後にこう言い残して息絶えた。

「最後に会ったのがあなたでよかったわ。私の仲間にはこんなこと、絶対に話せなかったものの」

ごく一握りの選ばれた者を支えるためにわずかな食事を与えられ、ひたすら物のように働き続け、未来に繋ぐものも残せぬまま生かさず殺さずの生殺し。

生まれ変わったら空を飛んでみたいという女の言葉が妙に頭にこびりついて離れなかった。

お気に入りだった飴色の綺麗な上っ面の皮が、知らぬ間に硬く分厚くなって分離しかかっている。

「空か……空ならこいつ等も追っては来られまい」

外へ出たところで、今よりも良い暮らしができるという保証はない。

できればずっと地下で暮らしていたかったのだが、いつまでも上っ面を取り替え続けることにも限界を感じていた。今度の中身はこの暮らしに向いていないのがわかる。

俺はもとの厓に戻ることなく、地上を目指すことにした。

連日の雨のお陰で土も柔らかく、想像していたよりは楽に地上に出られそうだ。

勢いそのままに外まで行ってしまおうとしたのだが、地上に出る一歩手前で壁の隙間から洩れる光を目にうけ、俺は掘り進める手を一旦止めた。

地上の眩しさはわかっていたつもりだったが。

長いこと薄暗い場所で過ごしていたせいで外の明るさに目がすぐには順応できなかった。暗くなるのを待つしかない。

すると外にいた先達が、穴の中で燦っていた俺を見つけてけしかけた。

「雨はもうじき止むだろう。そうなればいよいよこの鬱陶しい梅雨もおさらばだ。お前もはやくあがってこい」

そうだ、この雨が止んだら俺も行こう、先達たちのいる場所へ。地下でも地上でもないあの場所へ。

産声は大きくと決めている。俺は誰とも競わない。敵も仲間も必要ない。

仲間をつくるということは、敵をつくることにもなるのだから。

調子っ外れで耳障りだと疎まれながら、誰とも重ならない声を響かせてやる。

仲間とも敵とも違う、理解し共感してくれる相手にしっかりと自分の声が聞こえるように。

奴等が眠る夜のうちに、この雨が止んだら。

よし、いまならいけそうだ。